

---

# 崖に棲む猫

湯たぽん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

崖に棲む猫

### 【Nコード】

N6987R

### 【作者名】

湯たぽん

### 【あらすじ】

猫は、たまに何もない空中をじゅっと見つめて動かない時があります。

一体何を見ているのでしょうか・・・？

## **（前書き）**

若干のホラー要素を含みます。  
苦手な方はご注意ください。

崖に棲むネコ

・・・何してんだいアンタ。そこは危ないぜ。

オレの呼びかけに応じて、その女は振り返った。

キレイな黒髪を伸ばした、暗い印象を受ける女だ。まあもつとも、オレの所に来るヤツつてのはたいてい暗い顔をしているがね。

ちなみにオレもくらーい黒だ。黒猫だから当然なんだけどな。

オレはこの岬に住んでいる。ここの切り立った崖には滅多に人は来ないが、たまにこんな暗いヤツが現れる。

ヤツらの目的は・・・まあ目を見れば分かるが。

今日は空まで黒く曇っていた。女は小さくて黒いオレを見つけたらず、少しの間辺りを見回していた。

暗く、しかもごつごつした岩だらけの崖だからなかなか見つからないだろうな・・・

そして岩の上でじっとしているオレを見つけると、はじめて少しだけ微笑んで、声をかけてきた。

「・・・おいで。 お菓子あげようか」

オレはそんなモノは食わないが、 女はオレを受け入れてくれたよ  
うだ。

足もとまで走り寄って、 オレは女の目を下から覗きこんだ。

ああ、 やつぱり・・・。

目を覗きこまれて、 女はお菓子の事も忘れオレを見返してきた。

「キレイだね、 あなた。」

・・・私とは大違い」

そういうと、 恥じるように目をそらした。

ふいに強い風が吹き、 女の髪とコートをバサバサと乱した。

彼女が髪を直している間に、 オレは少し離れた大きな岩の上に移  
動した。

今度はオレをすぐに見つけると、 女はポケットからクッキーを出  
してきた。

「こつち来て、 もう少しお話しようよ。」

あと・・・ ほんの少しでいいから」

冗談じゃない。 この世で最後に話した相手がオレでした、 なんて  
たまらないぜ。

オレは女に近付いた。 一歩前に出てしゃがみ、 背中をなでようと  
するのをヒラリとかわして、 また岩の上に戻る。

「？」

避けられて訝りながらも、 女はまた一歩、 近付いてきた。

「どうしたの？ 私なんて・・・嫌い？」

また自虐に走りそうになるのを、少し近付いて止めてやる。

オレは近付いては離れ、またちょっと近付いて逃げをくり返し、女を崖から連れ出した。

住みかのすぐ近くにあるこの崖は、普通の大きな道路からちょっと離れるだけの場所にあった。

女を崖から連れ出すと、道路の向こうにはバスが止まっていた。田舎のバスってのはたまに妙な待ち時間があるもんだ。運転手も降りて一服していた。

そんな風景を目の前にして、女の目に迷いが生まれるのをオレは見逃さなかった。

女がぼうつと町を眺めている隙に、ようやくオレはクッキーを受け取った。

「あつ・・・」

なでる事ができずにクッキーだけ奪われて、女は少し恨めしげにオレを見た。

オレもまた目を見返した。

しばらく目を覗きこんだ後、今度はバス停の方を向くと、近所のオバちゃんが手招きしていた。

地元の主婦が、使いもしないのにバス停でのんびりくつろいで、自分で勝手に名前を付けたネコと戯れる。絵に描いたような田舎だな、ここは。

オレに釣られてバス停の方を向いた女は、自分が呼ばれたのかと思っただろう、慌ててうつむきコートのえりに隠れるように小さくなった。

オバちゃんに呼ばれたオレは、クツキーをくわえたままバス停の方へ走った。

「あ、待つ・・・」

また女の小さな声。

オレは一度振り返って女の目を覗きこむと、またバス停のオバちゃんに走り寄った。

クツキーを口から放すと、オバちゃんはオレをなでて言った。

「こんにちは、クロちゃん。クツキーくれるのかい？ありがとうねー」

なでられながらもう一度、オレは女の方を見た。

・・・戻りなよ、自分の場所に。

死にたい理由など分からないがアンタ、戻れる場所があるうちはここへ来るべきじゃない・・・

オレの鳴き声の意味などわからないだろうが、女の目から迷いが消えた。

もう、大丈夫だな。

女がゆつくりとバスに乗り込んでいくのを横目に、オレは大きなあくびをした。

適当にオバちゃんをからかった後、　オレはねぐらに戻ることにした。

崖の近く、　住みかまであと少しってところでオレは足を止めた。

暗い空を見上げると、　何かがふよふよ飛んでいるのが見えた。

崖の向こうの海からぼんやりとした光を放ちながら浮き上がっていた。頼りない動きで、　のろのろと。

ソイツはしばらくあたりを漂った後、　オレのほうへ近付いてきた。

誰かがオレの中に入ってくるのを感じる・・・そうか、今日はフタリいたんだな・・・

女の方にかまっている間にもうヒトリ来てたのか。

ソイツの魂は後悔と悲しみで真っ黒になっていた。オレ、　また黒くなっちゃうな。

目の前まできたソイツを、　オレはぱくんと飲み込んだ。暗い感情がオレの中に入り込んでくる。

・・・そうか、　アンタ相当辛い目を見て来たんだな。

しばらくオレの中で休んで、　できるだけ早く成仏しなよ・・・  
オレの中のソイツに語りかけると、　オレは住みかの岩穴へ入り込んだ。

今日はフタリ、　か・・・

ヒトリは戻り、　ヒトリは魂になってオレの中に入っちゃった。



こうして今までに何人、この崖に来るヤツを見たか分からない。

時々、こんなコトやめてさっさと住みかを変えちまおうかとも思う。

でも・・・

昔オレを愛してくれていたアイツの魂は、まだオレの中で眠っている。

オレのカイヌシだったアイツの苦悩は、まだしばらくは晴れないだろう・・・

こうしてオレが自殺しにきたヤツを助けたり魂を休ませてやったりして・・・本当にそれでアイツの魂は休まるんだろうか。

・・・ま、いいか。

オレは考えるのをやめて大きくノビをした。

休みたいヤツには休ませてやればいい。

ネコだってヒトだって、魂になっちゃってもそれは同じさ。

もうしばらく、ココにいてやるか・・・

そう締めくくると、オレはあくびをして。

何年か前に死んだオレの骸の横で目を閉じた・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6987r/>

---

崖に棲む猫

2011年10月8日21時35分発行